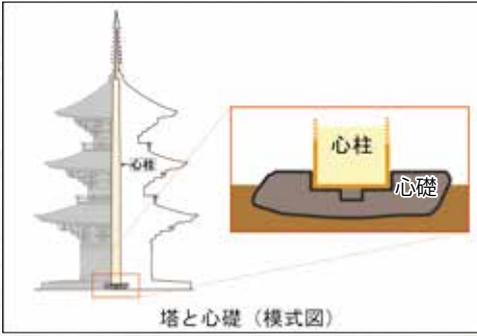


文化薫道

◆其の四十三 塔のある風景

たくさんの車が途切れることなく走る県道31号（通称5号線）。その塔原一号交差点に架かる歩道橋の下に、静かに佇む大きな石があります。古代寺院の塔の心礎（塔の中心に立つ柱を乗せる基礎石）だったものです。

今ある場所は本来の場所ではないことが、発掘調査で確認されていますが、近くに古代の寺院があったことは間違いないようです。



塔と心礎（模式図）



この心礎については古くから知られており、江戸時代の学者、貝原益軒は著書『筑前国続風土記』の中で、「塔原（とうのはる）」という地名はこの心礎に由来している、と記しています。

古代の寺院は、当時の最高の知識が集まる場所として、最新の技術で建てられた建物群によって伽藍（がらん）を形作っていました。その中でも特に目を引く存在は、当時の建物としては抜きん出た高さを持つ塔だったと思われます。平屋の建物がほとんどで、それすらもまばらな当時の景色の中で、天に向かってそそり立つ塔は、ひととき異彩を放っていたことは間違いありません。古代の超高層建築とも言える塔原の塔を、当時の人たちはどのような思いで眺めていたのでしょうか。

問い合わせ先／文化財課

